

一日中本を読んでもいい学部に進学したい、と高校生の頃、苦手な数学や物理の勉強をするたびに思っていた。念願かなって文学部に入学、本を読む日々が続く。周囲にも読書が嫌いという人は皆無だった。ところが世の中そんな人種ばかりではないと、結婚して少し驚いた。夫は工学部出身で、本というものを、とりわけ小説を読まないののである。向こうも驚いていたらしい。なぜ絵空事に泣いたり笑ったりするのか、なぜ一度読み終えた本を再び読むのか、と。おもしろい小説を読むと、力が湧いてくる気がする。滋養のある食べ物で身体が回復するのも似ているし、薬効成分の豊かな温泉に入るようでもある。ただし、万人に効く小説はない。どの小説をおもしろいと思うか、人それぞれであるから。小説を読む妻を異星人のように見ていた夫にも、おもしろいと思う小説が現れた。その本を手はじめに、私にとっての常備薬をいくつか紹介したい。この稿を読んだ方が1冊でも効き目を感じる本があれば紹介者にとって大きな喜びである。

『夜のピクニック』新潮社 『上と外』幻冬舎 恩田陸

おもしろいと夫が言ったのは『夜のピクニック』という小説だった。主人公は高校生、全校で一昼夜歩き続ける「歩行祭」という学校行事を背景に物語は進行する。よく晴れた秋の日の乾いた風、夕暮れの光る空、露で湿った夜道を歩く高校生たちの会話と心の中。夫と私は同窓生である。母校にこんな行事はなかった。にもかかわらず、読んでいる最中に何度も高校時代と同じ匂いの空気を感じた。平明な文章で読みやすい、第2回本屋大賞受賞作である。『上と外』は『夜のピクニック』とまた違ったタイプの作品である。ただ共通するのは主人公（こちらは中学生）がよく歩き、足に豆を作らないための方法を熟知していること。この小説の私にとっての魅力は、金型工場の技術者であり経営者である主人公の祖父が、ものづくりについて語っている箇所である。工学という知らない世界を垣間見た気分になる。東工大の金属学研究室の教授も登場し、工学的な雰囲気を増幅してくれる。そんな細部には興味のない人も、ダイナミックかつ精緻な話の展開には一気に引き込まれるのではないだろうか。

『風が強く吹いている』 三浦しをん 新潮社

運動は苦手だが、不思議と走ることについての作品に興味がある。村上春樹の『マラソン』についてのエッセイしかり、佐藤多佳子の『一瞬の風になれ』しかり、良い作品が多い。その中でも一等好きなのが、『風が強く吹いている』である。都内のぼろアパートに住んでいる10人の大学生（うち8人は長距離初心者）が箱根駅伝を目指す話で、その設定自体は全くの絵空事なのに不思議とリアリティがある。入学式前の4月の夜から始まり、春の明るい朝の町を、夏合宿の白樺湖を、秋の予選会を、そして正月の箱根を走る10人の言動の一つ一つが心に鮮やかに刻み込まれ、読んでいる間も読み終わった時も、しあわせな気持ちが湧き上がる小説である。

『坂の上の雲』 司馬遼太郎 文芸春秋

日露戦争でロシア軍のコサック騎兵を破った陸軍の秋山好古、その弟で日本海海戦の参謀として「天気晴朗なれども浪高し」を起草した海軍の秋山真之、真之の友人で俳句に近代の光をあてた文学者正岡子規の3人が主人公である。徳川幕府が瓦解した後、全国の無数の若者が志を高く日本という国を支えてゆく。その中で作者はこの3人に焦点を絞り、日本とは何か、日本人とは何か、国家とは何かについて、膨大な史料を用い描き出している。『坂の上の雲』だけではない。司馬作品の根底にはどれも日本について、日本人について明らかにしたいという思いが流れている。技術者として社会に旅立つ前に、是非一読を薦めたい作家の一人である。

『青年のための読書クラブ』 桜庭一樹 新潮社

女子高や女子大などの女の園には一度も足を踏み入れたことがなく、どんな世界なのかと思っていた。この小説を読めばある程度の疑似体験ができるのではないだろうか。伝統あるミッション系女子高が物語の舞台である。その閉ざされた乙女の楽園で、決して正史には記されない影の部分を読書クラブの部員がクラブ誌に綴っていく。華やかな園の片隅で埃にまみれて毎日本を読み暮らす彼女らは

マイノリティだが、変人の少数派ゆえに書き残せるものがあるという設定が読書好きには小気味よい。安保の頃の昭和から平成の未来まで、更に学園の創設者であるフランス人修道女のいた100年前のパリについて描いている縦の時間軸がしっかりとしており、ゆるぎない構成の小説となっている。

『ゲド戦記』 アーシュラ・K・ル＝グウィン作 清水真砂子訳 岩波書店

2006年に公開されたジブリ映画の「ゲド戦記」は観ていない。活字から思い描いてきた世界を壊されるのが怖かったからである。映画は3巻目の『さいはての島へ』を中心に描いているそうだが、小説は外伝も含めて全6巻あり、初めから読み進めてゆくと広大な物語世界を感じることができる。魔法を教える学院にゲドが入学する頃から話が始まるが、同様な設定でありながら、ハリー・ポッターとはかなり違う。ごつごつとした岩山を一步一步登ってゆくようなファンタジー作品である。

古今東西あまたの作家によって無数の本が記されてきた。書店でも図書館でも、書架の前を散策して、気に入った本があれば手にとってみよう。長いようで短い学生時代、心を動かす本に1冊でも多く出会えますように。

執筆者紹介

安原 明子

本学学術情報課学術資料係長。担当事務は、図書館資料の受入、管理、分類等。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『上と外』上・下巻 恩田陸著 幻冬舎文庫 2007年 1,400円

『夜のピクニック』恩田陸著 新潮文庫 2006年 660円

『風が強く吹いている』三浦しをん著 新潮社 2006年 1,890円

『坂上の雲』全8巻 司馬遼太郎著 文春文庫 1999年 5,360円

『青年のための読書クラブ』 桜庭一樹著 新潮社 2007年 1,470円

『ゲド戦記』全6巻 アーシュラ・K・ル＝グウィン著（清水真砂子） 岩波少年文庫 2009年 4,830円

[ブックガイド目次へ](#)